

今の私を造った二つの出来事

日本化薬株式会社 医薬研修室

塩田 直樹

「MRになって良かったこと」と改めて自分に問いかけてみました。

良かったこと？良かったこととは言い切れませんが、「今の自分を造り上げた原因の主たる部分は絶対にMRになったためと断言できる！」。それほどインパクトのある出来事を記憶しています。

出来事は二つあります。キーワードは「生きる」。この二つの出来事を経験するたびに少しずつ人生観が変わりました。

一つ目の出来事は、ちょうどMR(そのころはプロパーと呼ばれていた)5年生の頃の話です。今ほど訪問規制が厳しくなく、その日も私はいつものように外来を知り合いの先生がいないかと歩き回っていました。すると、向こうの方に顔馴染みの血液内科の先生が患者さんと話をしているのを見つけました。患者さんとの話が終わったら話をしようとゆっくりと近づくと、「お～い、塩田君」と思いもかけず先生のほうから声を掛けられ、「これは急ぎの論文検索？」と急いで近づくと、急に先生が患者さんに向かって、

先生「〇〇さん、彼があなたの病気の薬のレジメンを作ってくれているのですよ。」

患者さん「それはどうもありがとうございます。よろしくお願いします。」

と思えないアッパーカットを食らってしまいました。私は正直、目が点になり「先生それはないでしょう」と紹介して下さった先生を困惑した気持ちで振り返り、心の中で助けを求めています。当時の私の仕事は先生に文献を頼まれ悪性リンパ腫のレジメンを紹介していたので、その患者さんのレジメンもその中の一つだったのだと思います。弊社は抗癌剤が多いため当時そのような仕事が少なくありませんでした。レジメンというのは癌を治療する際に使う、複数の薬剤の効果や副作用などを考えて投与量や投与する時期を考えた設計図(投与予定表)みたいなものです。

仕事の先に患者さんがいるのは当然知っていました。この薬を投与される人達がどのような病気かも知っていました。しかし“自分の紹介している薬”に、どれだけの思いを持って、治療されている患者さんの一人ひとりの姿をどこか知ろうとしていませんでした。知るのが怖かったのだと思います。患者さんの“治りたい”と願う真剣な気持ちを少しでも受け止めようとする“覚悟”が当時の私にはありませんでした。自分の仕事の先にいる患者さんと向き合う自分がいませんでした…。私は「ハイ、頑張ります」と患者さんの顔を見て答えながらも、心は患者さんを直視できなかった事を今でも苦い思い出として覚えています。

二つ目の出来事は、それから10年ぐらいたったころの出来事です。すでにMRと呼ばれておりました。その施設は癌専門病院でとても患者さんの多い病院でした。その時も舞台は外来の前でした。アポイントを取り、外来で約束の先生を待っている時の出来事です。外来の診察室から女性がハンカチを顔に当てて出てきます。見るとはなしについつい目で追ってしまうと、患者さんは電話に向かい急ぎ話し始められました。…泣きながら…

患者さんA「ダメだった…やっぱり癌…ダメだった…」

声を殺して泣いています。聞こえてきます。待っている人達の全ての耳に、一瞬で緊張が走るのを感じました。誰も他人事ではないのです。また違う患者さんが走っています。同じようにハンカチを手にとり走って公衆電話に向かいます。

患者さんB「大丈夫だった、癌じゃなかった、よかった〜」…と、また涙…

その時、私は愕然としました。私の周りに座っている患者さん全てがこのような人生を抱えて、今こうしてここに座っているということに。ここにいる患者さんのうち何人かは時間が限られているという現実気がついてしまいました。

あれから十数年の時間が過ぎました。「生きる」ということが“有限”であるということを知ってしまった時から、自分の人生を大切にするようになりました。この論文の主題である「MRになって良かったこと」と言い切れるほどの自信はありませんが、少なくともMRにならなかつたら“命が有限”であるということに今ほどの思いを持てなかつたと思います。また仕事をする上で“覚悟”が必要であることも気付かなかつたかもしれません。MRという仕事は少なくとも私に“二つの大切な気付き”を与えてくれました。そして、それは今の私の生きていくための大切な“背骨”になっています。そう考えるとこの職業を選んで良かったと言えるのかもしれませんが。（MR経験 22年半）